

永岩会長の防衛大学校訪問

平成25年8月20日（火）、小原台は夏休暇中で学生の姿は校友会夏合宿以外まばらな炎天下の静けさにある中、防衛大学校同窓会の永岩俊道会長が國分良成学校長及び幹事の田邊揮司良陸将を訪問表敬し、対談を実施した。特に、「教育方針」「教育の現状と今後の改革の方向性」「日本に関わる安全保障環境」「同窓会に対する要望事項」をテーマとした対談を事前をお願いしていたが、お二人ともに建学の精神に思いを馳せつつ、熱く防大教育の現状と将来について語られた。

1 「さらなる高みを求めて」 國分良成学校長との対談

～防衛大学校における教育とは～

<会長>

部隊視察をされて防大出身の幹部をご覧になられてどの様に感じられましたか。その印象とともに、防大教育についてのお考えをお聞かせください。



<学校長>

部隊で多数の部下を指揮し、国民の目に見えない状況においても黙々とひたむきに頑張っている姿に感動を覚えました。学校長として意を強くした次第です。

<会長>

防大卒業生は、部隊の各レベルにおいて必ずそのリーダーシップが問われます。その礎を築くべき防大のリーダーシップ教育の在り方についてどのようにお考えですか。

<学校長>

教育、特に防大の教育は速効的なものではなく、20年から30年先を見通したものでなければなりません。時代に流されず建学の精神に戻り、60年に及ぶ防大教育の試行錯誤の過程を整理することが大切です。

「リーダーシップ」でまず大事なことは、優れた人間性でしょう。将来の任務に必要な幅と奥行きのある人間性とは何かを見つめる必要があります。論理的な思考力と併せ、日本文化や世界に関する教養は、人間性育成の基盤となります。昨年、近藤誠一文化庁長官（現在は退官）をお招きし、国防と文化の関係についてお話しをいただきました。

その一つの論点は「日本を守るといふときの日本とは？」この問いには、日本文化に対する真剣な考察によって身につけた教養が不可欠です。部下から見て魅力溢れるリーダーは、この様な教養に裏打ちされた人間性を有していると思います。

そのために読書の習慣は大切です。学生舎を回ってみると、やや読書量が足りない印象を覚えます。各学生が真摯に学生の本分を尽くし頑張っていることを承知しているがゆえに、やや残念な感じがいたします。

<会長>

私の経験からみて、防大の学生時代はとにかく忙しかった記憶があります。現在の学生はカリキュラムも更に大幅に増え、読書の時間をつくるのも大変なことでしょう。

<学校長>

学校の職員は、皆それぞれの立場で学生のことを考えているのです。そのため、一般学科の教官、防衛学の教官、訓練担当の教官、学生舎の指導官、校友会等、それぞれの立場で、学生の時間を多く確保したいのです。

現在、学校長から各職員への要望として、異なる担当の職員間で交流を行っています。時には別の視点で学生の姿を見つめ、トータルの学生生活を把握してほしい。すべては、「学生を主体に考える」ところから始まります。

～統合運用の時代における防大教育～

<会長>

統合運用の時代となり、陸海空を合わせた世界の士官学校においてもユニークな防大教育が、まさに真価を問われる現在において、学校長のお考えは如何ですか。実際のところ、未だ、統合作戦・運用に係る課題多々の状況ですが。

<学校長>

60年前の建学時に、将来の陸海空自の幹部を共に育成するとした思想はまさに卓見です。卒業後、10年20年は各自衛隊における活動が主体でしょうが、その先の部隊を束ねる立場に立った時、防大時代の絆は貴重な財産となることでしょう。何か事が起こって、統合運用される時は言うまでもありません。3自衛隊が有効に機能し得るか否かの要素の一つに、防大時代の絆は確実に入ると思います。

また、防大出身の幹部は、接してみても極めてオープンな印象を受けます。一般大学出身の幹部に対しても、シビルの教官に対しても垣根がなく、胸襟が開かれています。開かれた防大教育の証しと言えましょう。

～日本及び自衛隊を取り巻く情勢認識～

<会長>

「今、そこにある危機」防大の卒業式において、安倍総理の述べられた言葉です。自衛隊の役割が大きくなる予感の中で、防大生自身が時代のプレッシャーを感じていることと思います。ご専門の観点から日本そして自衛隊を取り巻く各種環境への御認識は如何なものでしょうか。

< 学校長 >

自衛隊の重要な役割は大きく3項目あると認識しています。第1の項目は、日本を取り巻く安全保障環境を安定させて保つ最終的な担保としての役割です。近年、活性化しつつある周辺国の状況も踏まえ、適切に機能を発揮していかなければなりません。第2の項目は、PKO等の活動による国際貢献ですが、これまでの地道な努力の積み重ねによる多くの実績は大きく評価されるべき内容を有しています。第3の項目は、先の大震災対処における自衛隊の活躍に見られるごとく、各種災害の多発する我が国の対処活動の大きな柱としての役割です。

これらの役割を適切かつ有効に果たしていく上で、考慮すべき問題点は二つあります。**第1が日本経済ゆくえです。**財政問題と防衛力整備は密接に関連していることはご承知の通りです。日本の国際的存在感を高めるためにも、経済力の回復が不可欠です。第2は同盟国である米国のアジアにおける存在、動向の行方です。米国もアジア重視とはいえ、日本と同様、財政問題をはじめ多くの国内事情を抱えています。これまでの様に、米国のアジアにおけるプレゼンスに全面的に期待し得るか予断を許しません。

～変化する時代と、さらなる高み～

< 会長 >

作戦環境が拡大する中で、自衛隊も新たな機能・能力を確保していく必要があると考えます。例えば、サイバー及び宇宙空間に対する対応力の拡充など各国ともに鋭意推進中です。私は米国空軍士官学校からの留学生のホストファミリーになったことがあります。その留学生は「宇宙工学」専攻でした。また、米国の軍学校では、「国家レベルの将来予測される危機に対するシミュレーション（クライシス・シミュレーション）」が行われていると聞きました。変化する時代にあって、その変化に対応し得る資質の育成は極めて重要と思いますが、防大教育においては、どの様にお考えでしょうか。

< 学校長 >

防大教育においても、時代の変化への対応は極めて重要なテーマです。現在、学校長の私が学内に呼びかけて、あらゆる機会をとらえて、さらなる高みを目指して議論中です。1学年480人体制の評価及び検討、時代の変化に対応した新しい学問領域の検討等、考えるべきことは山積していますが、まずは足元を見つめ、出来るところから着実に実施して行きたいと考えています。

現状に甘んじることなく、さらなる高みを目指した努力が大切なことだと認識しております。

～「足跡の記憶」防大同窓会への要望～

<会長>

防大同窓会は現役1万人を含め2万4千名が在籍し、現役を終えても、防大に対する熱い想いを抱き「防大の発展」「社会貢献」等に尽力したいとする同窓生も大勢おります。何か同窓会にご要望はありますか。

<学校長>

現在、学内においても鋭意考えているのは「防大の歴史そのものをきちんと残す」という事柄です。その時代、時代に足跡を残してきた先輩達の姿を歴史に留める活動は、防大の伝統及び新たな将来に向けての前進に大きな力を与えてくれます。この歴史に防大及び防大卒業生の名を留める活動に、同窓会も御尽力いただければ幸いです。

<会長>

同窓生の中には、職に殉じた方も多く、また有形無形の足跡は数多く存在します。この卒業生達の姿を目で見える形で在校する学生に提示出来れば、とても有意義な事だと思います。

また、安全保障関連の各種ポテンシャルを有した卒業生も大勢おりますが、現状では、その全体像が確実に把握されていないのが実態です。同窓生の有する各種の知見、経験をデータベース化して、検索する態勢を整える。同窓会ホームページにおいて、現在、検討中です。

～防大と同窓生を結ぶ絆～

<学校長>

データベースのお話は素晴らしいことです。卒業生の方々が有するポテンシャルを学生達が知ることにより、将来に向けて大きな動機付けになります。

また、同窓の卒業生の方々には、是非、防大に来ていただき在校生達と交流を持って頂きたい。今年の開校祭には3代にわたる統合幕僚長においでいただき、私の司会でパネルディスカッションを開催する予定です。学生達も楽しみにしています。

更に、卒業した留学生の存在も大変大きなものです。まさに、貴重な財産と言えるでしょう。これから東南アジアの国々を数多く訪問し、各国の同窓生と防衛交流の拡大を含めて語り合うつもりです。

<会長>

私も航空支援集団司令官としてタイのウタパオ海軍基地に立ち寄った際、タイの防大

同窓生20数人が歓迎会を催してくれ、大変感激いたしました。

また、今年度は私達15期生がホームカミングデーにより来校させていただく予定です。昨年の14期ホームカミングのお話を学校長が各所でしてくださり、14期生がとても感謝しておりました。本年もよろしく願いいたします。

<学校長>

ホームカミングデーのイベントは学校長の私にとりましても、同窓会との交流行事として大切にすべきものです。今後とも、同窓会との緊密な連携を保ちつつ、防大における教育をさらなる高みに向けて推し進めていく所存です。

ご支援ご協力の程、よろしく願いいたします。

